

古代の引つ越し

新年度の五月の開庁に向け、いよいよ引つ越し

作業が始まります。今回は千三百年前の引つ越しの話。六九四年、持統天皇の時に完成し、下毛野朝臣古麻呂も住んでいた藤原京は、唐の都長安城をモデルにした中国風の都城で、それまでの飛鳥京などとは格段の違いから「新益京」と呼ばれていました。その後七一〇年、都は藤原京から平城京に移ります。藤原・平城京間は二十数段で、新庁舎・県庁間とほぼ同じ距離です。この間はほぼ平坦な地形で、陸路を利用した荷物の移動はいいのですが、水運の場合、川を遡上するため大変だったことと想像されます。

この引つ越しも大変だったでしょうが、さらにその三十年後、聖武天皇の時代の天平十二年（七四〇）十月から同十七年五月までの五年間、平城京を離れ山背国（京都府）の恭仁京、摂津国（大阪府）の難波京、さらに近江国（滋賀県）甲賀郡の紫香楽宮に都を移します。その後、わずか十か月で再度平城京に戻ります。なんと五年間で五か所に都が移ります。この間、七四二年には恭仁京で国分寺建立の詔が、七四三年には紫香楽宮で大仏造立の詔が出されています。都が移らなければ大仏は滋賀県で完成し、平重衡や松永久秀に焼かれることなく、今も残っています。

たかもしれません。

平城京から恭仁京に移る時には、宮の中心の建物であった巨大な大極殿（第一次大極殿）も解体し恭仁宮に移しました。この時、大極殿と周囲の回廊、庁舎の一部も移転しました。平城遷都一三〇〇年記念で復元された大極殿はこの建物で、昭和四〇年代の発掘調査では建物の礎石や階段などの石材もすべて持ち去られたことが判明しました。そのため、遺構は残りが悪く復元検討の際、根拠となる事例を集める作業も大変だったそうです。

都は一か所に留まることが余りにも短かったため完成せず、『続日本紀』によると紫香楽宮では築地塀が未完成で、代わりに幕を張り巡らせましたが、元日の儀式が中止された記録も残っています。役所の庁舎も転々とする中で、不完全な機能で対応したのでしょう。五年後再び平城京に戻った際には、元の建物群の位置から東側へ約百メートルのところに大極殿や行政機関の庁舎をリセットするようにすべてを作り替えています。これが第二次大極殿や第二次朝堂院といわれる施設群です。

七一〇年の引つ越し、七九四年の平安遷都では都をすべて移すため、使える物資はすべて運んで利用しました。天皇が着座する高御座から一般職員が使

下野市教育委員会 生涯学習文化課

用する机・イス、文房具類、給食・宴会用の食器類、屋根瓦や柱や扉などの木材、釘などの金属製品等の建築部材まで運んでリサイクルします。柱や木材などは寸法が違った、あるいは破損した場合は目的を変更し再利用されています。例えば、柱だった木材は中をくり抜いて下水管のように転用し、扉材などの平らな木材は井戸枠として再利用されました。下水管は水洗トイレ用の配管だったとも考えられています。

宮殿や役所の引つ越しも大変でしたが、そこで働く職員も当然勤務地変更となります。聖武天皇期の五か年間は、全員が勤務地変更となることなく、残務処理などで平城京に残った役人もいたと考えられます。また、平城京の住民のすべてをすぐに転居させたとは考えられません。当然、庶民は農地を放棄して移住することはできません。さらに平城京内には、東大寺や薬師寺、興福寺、元興寺などの数百人規模の僧や運営関係者を抱える大宗教施設があるため、直ぐに生活機能をすべて停止する訳にはいきません。そのため、京内の東西の二か所にあった市（市場）も一部は存続したと考えられ、都の安全を確保する警備・軍事機能も残っていたため、五年後に都の機能が再構築できたと考えられています。